

言論不況における雑誌言論のこれから

出席者

岡本 厚 岩波書店『世界』編集長

河野通和 中央公論新社『中央公論』編集長

おかもと あつし

profile

1954年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒。1977年岩波書店入社。月刊誌「世界」へ配属となり、政治、教育、軍事、環境などを担当。1996年より同誌編集長。1998年に金大中韓国大統領に単独インタビュー。



こうの みちかず

Profile

1953年生まれ。東京大学文学部卒。1978年、中央公論社（現・中央公論新社）入社。「婦人公論」編集長として、同誌のリニューアルを成功に導く。2001年1月より、雑誌編集局長兼「中央公論」編集長として、現在に至る。



工藤 僕たち言論NPOでは「言論不況」ということを自己批判も込めて打ち出しています。今世界も日本も歴史的な転換期を迎えているなかで、単にメディアとしての中立性ということじゃなくて、編集者としての僕たちの側がある程度踏み込んだ議論を通じて、立場というか、覚悟を固めていかないと、議論形成は進まないんじゃないかという認識をもっているわけです。

今日おふたりに集まっていたいただいたのは、論壇に対して影響力もあり、歴史もある雑誌の編集長が、今の言論不況、これからの言論のあり方についてどういう認識をもっていらっしゃるのかをうかがうためです。

まず、岡本さんからお願いします。

岡本 私は「言論不況」の状況は、ここ半年ぐらい、あるいは9月11日のテロ事件以来、大きく変わっていると見ています。読者の食いつきというんでしょうか、議論に対する真剣さが変わってきていると思います。

経済の問題でいえば、失業が非常に大きな問題になってきた。10月の段階で失業率5.4%という数字が出ましたが、若年層や中高年以上では、その数字はもっと高くなっています。これは非常に深刻で、大学を出ても仕事がない、高校卒業ならもっと仕事がない。そういうなかで、一体自分たちはどう生きていったらいいんだろうか、と皆真剣に考え始めている。バブル時代だったら、ほとんど社会のことや経済のことは考えなくてもよかったのが、いまや考えざるをえない時代になってきている。

それから、もう一つはテロと戦争ですね。これに対する反応の仕方が、僕は湾岸戦争のときは全然違うと思います。湾岸戦争のときは、イラクという遠い国での戦

争だったけれども、今回はテロの映像を見るなかで、これはどこでも起こり得る、世の中や世界全体が変わってきているという不安が、特に若い層のなかから強く出てきていると感じます。

『世界』の2001年11月号は、報復の戦争に反対するというテーマだったんですけども、これは3日で売り切れました。結構若い層、学生たちからの反応がこれまでにないですし、著者に対して、学園祭に来てくれという依頼が10件くらい集まったそうです。こういう反応を見ると、テロの戦争と引き続く事態をどう見たらいいのか、自分たちも無縁ではないという不安が出てきているように思うんです。

そういった不安とか、世の中はどうなっているんだろうという根本的な疑問、それに答えるのはおそらくわれわれ雑誌の仕事でしょう。テレビや新聞、あるいはインターネットだと、どうしても情報が断片的になってしまう。ある程度枚数のある、そして、歴史的な問題も含めて深く追えるような雑誌メディアが、今求められているのではないだろうか。そういう意味では、必ずしも「言論不況」とばかりは言ってられなくて、もしそういう読者の関心に応えられないとすれば、われわれ自身の責任だと思います。

「論壇は狭い世界のなかで先細りしている」(河野)

工藤 河野さんはどうお考えですか。

河野 私が『中央公論』の編集長になったのは、2001年の1月で、それまでの6年半は『婦人公論』の編集長をやっていました。2000年の暮れになりますが、新編集長のお披露目ということで、中央公論の応援グループというか、学者や企業人、広告代理店の人たちとの懇親会があったのですが、その場に出てまず思ったのは、『婦人公論』で女性の集まりはたくさん行っていたんですけども、それに比べてなんとグレーで活気がないのだろうか、ということです。女性の懇親会だったら、会場の真ん中にみんなが集まってきて、談笑する。服装も華やかだし、みんなにパワーがあって、なんとなく場が膨らんでいく。

男の場合は集まっても暗い色の背広で、ほとんどの人が壁際で水割りを持って立っている。誰かが登壇してスピーチをすると、それを聞いて拍手しているけど、真ん中に人が集まらない。元気な女性たちの世界から、今後はそういう世界へ戻っていくのかと思うと、なんだか非常に暗い気分になって、次期編集長としてあいさつを求められたときに思わずそういう気持ちを率直にしゃべっちゃったんですけどね(笑)。

つまり、男と女を比べたときに、どうも男の世界が沈んでいる。言論に携わったりし

ている人たちが男性中心だということを考えると、ここをどういうふうに盛り上げればいいのかとまず思いました。

『中央公論』編集部に移って、実際、どういう人が書いていて、どういう人が読んでいるかをもう一度改めて点検し直してみると、論者は私が6年前にいたときとあまり変わっていなかった。それから、読者については平均年齢が上がっていて、新しい若い読者の顔が見えてこない。論壇というのは、ある閉ざされた世界のなかでどんどん先細りしているんじゃないかと思いましたね。

2000年の10月から11月は、長野に田中知事が誕生したし、国会では加藤政局ありで、少しずつ変わり始めているなという感じはあった。だけど、加藤政局が崩れた後で、(昨年7月の)参議院選までどういう波瀾があるのかということ、プロの人に聞けば聞くほど、「何にもないよ」という答えが返ってくる。そんなものかな、と思いましたね。国民のマグマがどういう形になって現れるかはわからなかった。

小泉政権の誕生というのは、岡本さんが先ほどおっしゃたここ半年ほどの変化の取っかかりの部分だったと思うんです。小泉内閣が誕生したことで、みんながそれに対して何か発言してみようかという気分になった。田中知事誕生や加藤政局が一つ階段としてあって、それをもう一段上るようなところが小泉政権誕生だったと思うんですよね。

小泉人気は、ちょっとバブリーなところがあるとか、いろいろなことをいわれてますけど、たとえバブルにせよ、みんなが政治に思いを寄せたというか、初めて興味を持ったというのは大きな変化だったと思う。

「雑誌としての安定性より、新しい発見が必要」(河野)

工藤 河野さんの指摘でなるほどと思ったんですが、有名人とか、大御所とかがいろいろいて、雑誌はそういう人たちに依存している面がかなりあります。そのなかで、新しい発言者をどう開拓していくということも含めて、雑誌のあり方が問われているような気がします。

岡本 その答えがぱっと出れば、われわれの仕事も苦労はないんですが(笑)。正直言って、私も苦心惨憺しているところです。

ただ、『世界』でも『中央公論』でも、論者は比較的若い人も入ってきているんですよ。もちろん60代、70代の論者もいるけれども、30代、40代の人もいっぱい書いている。では、若い論者が増えて、それが若い読者の開拓につながっているかということ、そこはなかなか難しい。

それから、さきほど河野さんも言われたように、総合雑誌といわれているメディアは、やっぱり完全に“おじさん化”していて、古いメディアというふうに見られている。そこに居直って、安全に中高年男性にターゲットを絞っている雑誌もあります。今の女性はお金もあるし時間もある。もちろん、物を考える能力というか、発言していく力やネットワークをつくっていく力もある。20代、30代のそうした女性たちと、われわれはどういうふうに切り結べるのか。

『世界』の編集部には今6人いて、そのうち2人は女性。彼女たちの感覚をできるだけ大事にしていこうとは思っているんですけども、それが完全にできているとはいえませんがね。

工藤 河野さんはこれから『中央公論』でどういうふうに筆者開拓を進めていこうとしているんですか。

河野 有名だからとか、著作が多いとか、雑誌をつくるうえでの安定感で論者を選ぶのは、一回キャラにしようと思えば編集部に呼びかけました。

新しい発想をもって何かにチャレンジしようという人であれば、老若男女は問わない。キャリアを重ねてきた人でも、新しいチャレンジ目標に向かって何かやろうという人は筆者として大歓迎。

編集者自身の発想も惰性で動いていた部分があると思うんです。ですから筆者開拓だけでなく、われわれもテーマや切り口を新しく発見していかななくてはならない。この問題ならあの筆者に頼めばいいとか、この前はこういうことを書いてもらったから、今回はこういう視点でやってもらえばいいというつくり方だと、雑誌の連続性は約束されるし、特集の点数としても及第点は確保できるかもしれないが、そういうのは一度ご破算にしよう。

もちろん雑誌としての信頼感を損なうようなことがあってはいけない。けれども、僕らが考えている連続性とか、それから筆者に対しての評価というものを、果たして読者はどこまで気にしているか。それよりも、おもしろい発想とか、新しい文体をもった人を読者は望んでいるのではないか。だから、そこに対して編集部が躊躇しないようにしようと心がけています。

ただ、それが本当に常に成功するかというと、そう単純ではない。見事な空振りもあれば、ポテンヒットもある。逆に、思いもかけないおもしろい出会いもある。試行錯誤の繰り返しですね。

「二元論的な考え方は意味をなさなくなった」（岡本）

工藤 たとえば読者が疑問に思っていて、それについて何か読みたいと思っているとすれば、僕たち編集者側はもっと問題意識をもってそれに挑んでいかないと、ただ百貨店みたいにいろいろな議論がありますよ、というのではいずれはだめになると思います。『世界』にしる『中央公論』にしる、伝統と歴史があるなかでいろいろな議論をしてきた雑誌なわけですが、一方で、冷戦が終わってイデオロギー対立の構造が崩れ、今国際社会のなかでテロが大きくクローズアップされ、グローバリズムへの反動でアメリカも曲がり角を迎えてきた。日本は戦後システムが壊れ、次の出口が見えなくて、不良債権で没落寸前。だとすると、今までの伝統の議論にすがってはいは、思考停止に陥ってしまう。

どういふふうな問題意識で筆者と議論し、彼らを育てていくか。ある意味でそれは雑誌の原点でもあると思うのですが、『世界』の編集部ではどういふふうに考えているんですか。

岡本 『世界』は1945年暮れ、つまり終戦直後に、戦後体制の出発を契機にしてできた雑誌です。だから、約半世紀。長いともいえるけれども、『中央公論』『文藝春秋』はもっと前からあるわけで、やはり原点というか、雑誌としてのアイデンティティー、核には違いがあると思う。つまり、戦争がなぜ起こってしまった、なぜ止められなかったのかというのが岩波茂雄が『世界』を始めた原点で、そこに雑誌の魂みたいなものがある。それがなくなったらこの雑誌をやっている意味がないと僕は思っています。

ただ、だからといってずっと同じようなことをいっていけばいいかというと、それは全然違う。工藤さんが言われたように冷戦は10年前に終わっているわけですから、冷戦のなかですっかりれてしまった二元論的なものの考え方は意味をなさなくなってきている。

そして、今年9月11日以降、世界は大きく変わっていくでしょう。その変わり方とか、変わる深さがどのくらいなのかというのは、僕もまだわかっていないし、世界中の人たちがそれを議論し始めているところだと思いますけれども、大きく変わることは間違いない。そのとき、日本あるいは東アジアという枠組みで、どういふ社会をつくっていけばいいのか。それは経済においても、安全保障においても、あるいは環境などすべての問題においてもです。そういった問題意識ですべて考えていきたいと思っているんです。

ただ、これもなかなか難しいところで、編集部内でいつまでたっても議論が終わらないときがあるんですよ。だから、あるところで私が「こういう方向でいこう」というこ

とを打ち出していく必要もあるんじゃないかと思っています。雑誌というのは、主張に強いものがないと、読者のところに届くときはどうしても拡散して、希薄化してしまいますから。まさにその方向づけをするのが、編集長の重要な仕事だと思います。

「常に世の中に語りかけていこうと思っている」（河野）

工藤 河野さんはどうお考えですか。

河野 雑誌の原点ということに関していうと、『中央公論』はなかなか難しいところがありまして、総合雑誌なのかオピニオン誌なのか、これはまだ決着がついていないんです。会社のなかでも意見を求めれば十人十色です。ただ、大雑把にいうと、幕の内弁当のように、いろいろな議論、テーマをまさに総合的に、社会の鏡のようにしてこの雑誌を編集してきたのは事実です。それはそれで、編集部は懸命につくり方を磨いてきたと思うんですよ。

しかし、状況は変わり、時代が求めているものは変わってきている。総合雑誌は総合雑誌なりに変化を遂げなきゃいけない。この雑誌は結局何を言いたいのかということに対して、はっきりしたメッセージを用意していかなきゃいけないだろうと思います。『中央公論』のアイデンティティーを、ああでもない、こうでもない議論していても明快な答えはないので、結局はその時々編集長が責任をもってリードしていくしかないと思います。

先日ある書店主が僕のところへ来て、中央公論がもっと売れるようにするためには、秘策があると言います。それは、たとえば自分が銀座に飲みに行って、店のホステスさんに「これどういうことなの」と何かを聞かれたとき、『中央公論』を読んでいけばたどどころに説明できる、問題の本質がパッとわかって、なおかつ、人とは違う視点で説明できる。そういう雑誌にしてもらえれば、絶対に人はこぞって読むと言われたんです。

この話は笑って聞き流すこともできるんですけども、わりと重要なことが含まれているなと思いました。これまでややもすると「通（つう）」のための議論をしようという癖が総合雑誌のなかにはあった。こういうことを言っただけは笑われてしまうとか、どうしても業界的な常識に縛られていた。狭い意味での学問業界とか、論壇業界とか。それから、社会科学にしろ人文科学にしろ、基本的にはいまだに男の言葉で成り立っています。そこをもっと女性や素人性のある言葉に向けて開いてみることも必要かもしれない。

もう一つ、これは今われわれが実際やっていることでですけども、評論家の大塚英志さんに呼びかけ役になってもらって、夢の憲法前文をつくらうとしている。これは読者

参加型企画として始めたんですけども、改憲派、護憲派の論議とは別に、こういう思考実験はとてもおもしろい。すでに150通ほど私案・試案が寄せられていて、なかにはユニークなアイデアもあります。とにかく雑誌として世の中に対して、常に語りかけ、呼びかけていこうと思っています。

「小泉改革は企業サイド強化に偏りすぎ」（岡本）

工藤 『世界』や『中央公論』、それから私がいた『論争 東洋経済』もそうだったんですけども、図式的に言えばかなりリベラルな側と見られているわけです。一方で、反米、反中国などをかなりストレートな感情で議論をしている雑誌がある。そういう雑誌が結構、部数がとれていたりする。

逆に言いますと、イデオロギー対立の崩壊以降、リベラルをイメージした雑誌の議論の展開力が弱まったのではないかと。つまり、抽象的な議論で、現実感がないと。現実的には、ビジネスの世界も人々の生活も変化がすごい勢いで進行しているときに、イデオロギーの残滓を引きずっていて、現実に対して無理解だったのかもしれない。

僕たちは自由主義とか個人主義、自己責任の社会に対して共感をもつ。だけど、一方で社会的なサービスとか、福祉厚生もきちんとやってほしい。では、そこからどういう議論を展開していくか。小泉改革の方向性も含めてうかがいたいんですが。

岡本 議論の展開力が弱かったのではないかとというのは、そのとおりだと思います。ただ、それはこれまでの雑誌と読者という固定した関係に依存していたり、あるいは、先ほど言われたようなある種、業界内の言葉、「通」の議論になっていて、一般の読者はもうついていけないということがあったのかもしれない。

それは単に雑誌だけじゃなくて、新聞もそうだし、言論といえば政治の世界だってそうだと思います。議論が広がらないというのはわれわれ自身の努力の問題もありますが、社会全体の問題でもあると思うんです。

小泉改革については、最初のうちは正体がよくわからなかったけれども、基本的にはネオリベラル的な経済改革路線を踏襲していることでははっきりしている。もちろん特殊法人や道路特定財源、あるいは公共事業の問題などはどんどん改革するべきだと思いますけれども、経済政策的には企業（供給）サイドを強める方向に偏りすぎているのではないかと。むしろ今の不況の要因というのは、生産サイドの問題ではなくて、消費があまりに弱いという需要サイドのほうが大きいと思います。そうしたときに企業サイドを強める方向に偏りすぎると、社会保障は削る、雇用も危ない、将来的には年金をもらえ

るかどうかわからないということになって、みんながさらに財布のひもを締めてしまう。これではデフレスパイラルは止められない。

97年の橋本内閣のときに財務省（大蔵省）が書いたシナリオで、消費税率アップ、医療費負担増等をやって一気に経済を冷え込ませ、結局、橋本さんの財政改革路線は頓挫した。小泉さんがやっていることは、さらに悲劇的な形でそれを繰り返そうとしているのではないかと、そういう心配は強いですね。

「経済成長を望まない若者が増えている」（河野）

工藤 小泉改革については、確かに経済の専門家の間でも議論が分かれていますね。それと同時に、政治改革についても将来像が見えないんです。

いま、与党による法案の事前審査の問題が議論になっています。内閣よりも、実際には自民党の政調会とか部会で法律や政策が決まってしまう。内閣も国会も空洞化している。それで、事前審査なんかいらないうと、自民党からすさまじい攻撃を受ける。

たとえばイギリスでは、議院内閣制といったら、与党と政府は一体で、内閣のメンバーと党のリーダーは同じ。日本の議院内閣制は、明らかに政治システム的な欠陥が見えてきている。

そうは言っても、悩んでしまうのは、有権者がそうした政治家を選んでいることです。利害調整型の政治家を選ぶから、結局、利害調整のために部会が必要だということになってしまう。永田町だけの議論では解答が出ない状況になっているので、河野さんのおっしゃるように生活者レベルで僕たちが意識を変え、発言し始めないといけない。

河野 国としての将来が見えないというのは、実に苦しい話ですね。僕は間もなく50歳ですけれども、これぐらいの歳になるとあまり苦しいという感じもなく、この先、昨日の延長のように明日を暮らしていこうという感覚がある。でも、若い人たちは本当に苦しいと思うんです。自分たちが30歳、40歳になったとき、この国がどうなっていて、どういう幸せを自分たちが享受できているのか、とても真剣に考えて、悩んでいるはずですよ。

若い人たちと話すと、彼らは「成長なんて、別にいいですよ」「とにかくそこそこの国であってほしいんです」という発想、意見が比較的多い。こういうふうを考えていくと、「構造改革なくして成長なし」のその「成長」の意味するところ、構造改革のゴールとして設定すべき部分がまったく変わってくる。

工藤 確かに構造改革の目標を、たとえばかつての経済成長を取り戻すとか、今までの経済規模を維持するというのであれば、それはちょっと無理だと思いますね。若い人たちの意識は変わってきていて、もっと違う生き方、生きがいを求めている。それが日本の国としてのビジョンにつながるのかもしれない。

河野 今の国際環境をみると、中国の経済力がぐんぐん伸びてきているし、また昨秋のテロ事件を機に世界がどうなっていくのかも予断を許さない。そうした激動期であるにもかかわらず、日本が国家戦略として、何を国益上の優先事項として、国をどうマネージしていくか、まだちゃんと整理できているとはいえない。夢のある国づくりとか、それを実現するための人づくりが政治家によって用意されるかということ、あまり期待もできない。

小泉さんがいかに「自分の言葉」で政治を語っているとはいっても、彼が本当に自分の言葉でそういう夢を今の若い人に与えてくれるとは思わない。だから、これまで政治に対して発言しなかった人や国の将来像について真剣に悩み始めた人たち、そういう人たちとどう手を携えてやっていくかが、総合雑誌にしる、言論誌にしる、これからの課題だと思います。

「現場に行かないと変化は確認できない」(河野)

岡本 先ほど若い人の間で「これ以上、成長なんかいらぬ」という意識が強いという話がありましたが、そういう変化が出始めたのは、労働の規制緩和が進んだために、フリーターとか派遣社員とか不安定な非正規雇用が増えてきて、賃金も下がって、将来が安定していないところからくるのだと思います。そういう状況で、年金を払いなさいとか、それは世代間で負担を分かち合う連帯で責任だといったって、無理ですよ。若い人たちに対して社会が責任を果たしていないのに、どうして若い人たちが社会に責任を負おうとするのでしょうか。

僕らのところにも学生のアルバイトが来ますけれども、彼ら、彼女らは別に『世界』に責任は負わないです。これからどんどんそういう人たちが増えていくと、本当に責任をもって仕事をやっていく人たちが、逆にどんどん減っていくということです。アメリカがそうになっていますけど、日本の政策もそういう方向に進んでいる。そうすると、これから10年で社会全体がへたってくるのではないか。

僕は小林よしのりは好きじゃありませんけれども、彼が言っているなかで唯一共感できるのは、「公（パブリック）」という意識がどんどん欠けてきているということです。こ

れはそのとおりだと思う。小林はすぐそれを国家に結びつけてしまうところが間違いですが、この公共の意識がいちばん欠けているのが、国家を変えている官僚。狂牛病の問題にしても、エイズにしても川辺川ダムにしても、あれでは全然仕事をしていないといわれても仕方ない。何のために税金を払っているんだと、誰だって思う。

仕事というのは、個人が食べるためもあるけれど、同時に、社会全体とか、他人のために何か役に立つことをすることです。そういうお互いに責任を持ち合うような空間がつかれていかないと、競争だけやっていけばいい、人を出し抜けばいいというだけでは、社会は非常に不安定化するし、怖い社会になってくると思いますね。実際犯罪が増えているでしょう、それがおかしなふうに進むと、ファシズムが台頭しかねない。そう安心してられないなと僕は思います。

工藤 たとえば公共事業にしても、将来の世代に便益があるからこそ、それを長期債務の形で実行していくんですが、将来の世代がそれを求めている可能性があるわけです。年金の話も同じ。それを今の政治は解決する自信がないんですね。

岡本 僕はときどき、地域の集まりに呼ばれて話をするところがあるんですが、そういうところに行くと、商店街のおやじさんとか中小企業の社長さんや農家の人たちが、真剣に悩み苦しんでいる。そういう地に足をつけて生活している人たちが、もう公共事業はだめだと思っているわけです。

以前なら地元にお金が落ちればよかったけども、今は違う。道路をつくってもらっても橋をつくってもらっても、借金を増やすだけじゃないかと。では、われわれはこの地域でどうやって生きていくのか、それを誠実に考えている。なかなかその答えは出せないにしても、いろいろな実験をしたりしている。彼らにとってみれば、それこそもう後がないんですよ。

河野 岡本さんのように、現場に行く機会をもつというのはとても大事だと思いますね。雑誌の編集長というのは管理職も兼ねていますから、会社のなかで雑用に追われる。そうすると、リアルな場面に立ち会うことが非常に少なくなってきましたよね。よその会社の編集長や仲間と会っても、発想が膨らんでいくというケースは意外に少ない。たまに言えば、売れたの売れないだの、つまらない世間話で終わっちゃう。

だけど、岡本さんのように商店街の人や農家の人に会いに行って、いろいろ話を聞けば着実に新しい発想につながる。あるいは、現実起こっている変化を確認できるところがありますね。

工藤 僕たちはもっと動き回って、人の意見に耳を傾けて、いい論者を育てていく。そして、僕たち自身が時代と格闘して、真剣に悩まなければいけないかもしれません。お2人とも編集長としてこれからも頑張ってください。今日はどうもありがとうございました。

(司会は工藤泰志・言論NPO代表)